

氏名	山口 静枝 (Shizue Yamaguchi)		
学位の種類	博士 (心身健康科学)		
学位記番号	甲第 17 号		
学位授与年月日	平成 25 年 9 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	農村地域自立高齢者の productive activities が主観的幸福感に及ぼす影響 Relationships of productive activities to subjective well-being in the elderly living independently at home in a rural area		
研究指導教員	教授 近藤 昊		
論文審査委員	主査 教授 青木 清	副査 教授 鈴木 はる江	
	副査 教授 小林 修平	副査 教授 柴田 博	

## 博士學位論文内容の要旨

山口静枝の博士學位論文は緒言、研究方法、結果、考察、結論の5つの部分から構成されている。

緒言では、現在日本において49.7%という高い高齢化率を示す徳島県のK町に在住する65歳以上の自立高齢者を対象として、サクセスフル・エイジングの構成要因の一つであるproductive activitiesがどのように自立高齢者の主観的幸福感に関連しているのかわからないかを明らかにすることを目的として、量的調査研究を行ったことが述べられている。

対象者は徳島県K町在住の65歳以上の高齢者312人である。調査期間は2011年6月から10月までであり、調査は戸別訪問し質問紙を用いて実施した。調査項目は①主観的幸福感、②人口学的要因、③身体健康要因、④心理的要因、⑤経済的要因、⑥productive activitiesとして有償労働(いりどり従事)、近隣支援活動、ボランティア活動とした。この研究は本学の倫理審査委員会の承認(第257号)のもとで行った。

結果の項目では、研究のための分析対象者は270人(男性93人・女性177人、回収率86.5%)であることを示した。分析対象者の平均年齢は76.4±6.8歳(65~96歳)であり、75歳以上の高齢者は59.5%であった。また、家族構成は独居者の割合が21.5%であり、有償労働の従事者は59.3%であった。主観的幸福感については、生活満足度K(Life Satisfaction Index K:LSIK)の尺度によって測定した結果、LSIK得点の平均が4.4±2.3点であり、年齢と性に関する有意差がみられないことを示した。この結果にもとづき、LSIK得点を従属変数とした重回帰分析を行った結果、productive activitiesの有償労働(いりどり従事)、身体健康要因の身体の痛み、慢性疾患、食品摂取多様性、咀嚼力、睡眠時間、手段的日常生活動作能力(Instrumental Activity of Daily Living:IADL)が主観的幸福感に関連していることが認められた。また、主観的幸福感は心理的要因である喜ばれていること、夢中になることとも関連していた。

考察の項目においては、これまでの先行研究では有償労働と主観的幸福感結びつかないという報告であったが、本研究では有償労働であっても、いりどり従事では主観的幸福感と関連がみられたことを述べた。それについて、いりどり従事は有償労働であるが、その成果に他者に喜ばれるという付加的要因があることから、主観的幸福感を高めることになったと推察している。

結論として、本研究では、有償労働であるいりどり従事について、その仕事内容によってもたらされる成果が他者に喜ばれることから、従事者の主観的幸福感を高めていることが明らかにされたと述べている。

## 博士學位論文審査結果の要旨

山口静枝の博士學位論文は、高齢化率が高い限られた地域に在住する65歳以上の自立高齢者を対象として、サクセスフル・エイジングの構成要因の一つになっているproductive activitiesがどのように自立高齢者の主観的幸福感に関連しているのかわからないかを明らかにすることを目的として、徳島県K町に在住する65歳以上の自立高齢者を対象とし2011年6月から10月までの期間に量的調査研究を行った成果をまとめたものである。

データは、K町に在住する65歳以上の高齢者の自宅を戸別訪問し、質問紙を用いて収集したものである。対象者は65歳以上の高齢者312人である。この研究は本学の倫理審査委員会の承認のもとに行われた。調査項目として、①主観的幸福感、②人口学的要因、③身体健康要因、④心理的要因、⑤経済的要因、⑥productive activitiesとして有償労働（いづれに従事）、近隣支援活動、ボランティア活動を取りあげた。いづれに従事とは、研究対象地域における特徴的な組織のもとに形成された有償労働を指している。また、主観的幸福感、古谷野らによって開発された生活満足度K（Life Satisfaction Index K：LSIK）の尺度を用いて測定した。

結果として、分析対象者は270人（男性93人・女性177人、回収率86.5%）であった。平均年齢は76.4±6.8歳で75歳以上の高齢者は59.5%、家族構成は独居者の割合は21.5%、有償労働に従事者は59.3%であった。LSIK得点の平均は4.4±2.3点（range：0～9）であったが、年齢および性に関する有意差はみられなかった。LSIK得点を従属変数とした重回帰分析を行った結果、productive activitiesの有償労働（いづれに従事）、身体健康要因の身体の痛み、慢性疾患、食品摂取多様性、咀嚼力、睡眠時間、IADLが主観的幸福感に関連していることが示された。また、心理的要因である喜ばれていること、夢中になることについても主観的幸福感と関連していることが明らかになった。

山口は以上の結果にもとづいて以下のような考察を述べた。有償労働と主観的幸福感については、これまでの研究では関連が無いという報告であったが、本研究では、有償労働でも「いづれに従事」のような場合であれば主観的幸福感との関連があることが明らかになった。このことについて、「いづれに従事」は有償労働であるが、仕事によって自分以外の相手から喜ばれるという現象が付加的要因となって従事した労働者の主観的幸福感を高めることに寄与したと考えている。

結論として、山口は、これまでに有償労働が主観的幸福感を高めるという報告がなかったが、本研究によって「いづれに従事」のような特性をもった有償労働に従事する高齢者にとっては主観的幸福感を高める要因になっていることを明らかにできた述べた。

口答試問では、以上のような研究の内容について約45分間にわたり発表を行った。発表後に各審査委員から研究内容について各種の質問およびコメントがあった。発表者は各種の質問に対して的確に回答した。しかしながら、各審査委員から論文内容の一部と文章に修正すべき点があることが指摘され、文章の修正あるいはデータの分類などについて修正して再提出することとなった。その後、審査委員会は修正再提出された論文について審議を行った。その結果、申請者は専攻分野について自立して研究を行うことができると判断されるとともに、研究内容の独創性に加えて本研究が心身健康科学の分野に寄与するものと認められ、全会一致で合格と判定した。

以上のように、山口の研究は高齢者の有償労働のあり方について新しい方向性を示したものである。それは、日本人高齢者が在住する山村地域において、「いづれに従事」を参考として有償労働が主観的幸福感を高める可能性を示したもので、将来の心身健康科学の発展に寄与するものである。したがって、山口静枝の論文は心身健康科学の学位（博士）に値するものである。また、山口は公開発表会（約30名参加）において研究成果を発表し、評価得て合格と判定された。今後、研究者として自立するに十分な研究成果であると判断された。